

## 命を育てる責任

二年 平沼樹里

つい最近、私の家には新しい家族が増えた。猫で名前はペタ。ムチムチとした黒い肉球で地面をペタペタと歩くので、私が付けた名前。インターネットで調べたところ、ペタの毛色はキジ白だそう。性別は女の子。私が知っているペタのプロフィールはこれだけ。ペタは捨て猫なのだ。

ある日、私が塾から帰ってくると家の庭から「ニャー」と猫が鳴く声が聞こえたので辺りを見回してみた。すると、そこにはペタの姿があった。でもペタは今とは全くちがう酷い姿だった。身体はとても細く、脚や顔からは血が出ていた。私が、

「どうしたの？大丈夫？」

と言いつ手を近づけた途たんペタはシャーと歯を出し、猫パンチをしてきた。赤い首輪をつけていたのどこかの飼い猫が逃げてしまった迷い猫だと思い、その日は何もしなかった。

次の日の朝、庭を見るとまだペタがいた。次の日も、その次の日もペタは私の家の庭から一向に出なかった。そしてある日の朝、私が庭に出ると、足元にモフツとした感触があった。ペタが私の足にすりすりしていたのだ。私は母に言った。

「この猫ちゃん、もしかして捨て猫じゃないかな…。お腹も減ってるみたいだし…。うちで飼っちゃだめ？」

母は、少しの間ペタを見つめてうーん…と考えていた。その間もペタは私の足から離れなかった。

「じゃあ、ちゃんとお世話するって約束するなら、飼っても良いよ。」

私は、

「うん。ずっとずっと大切にするー！」

と言いつペタの頭を優しくなでた。ペタは、私が出しても怒らず、ゴロゴロとのを鳴らしていた。この時、なんだかともうれしかった。ペタが私達を信らいてくれているように感じた。こうしてペタは私たち家族に仲間入りしたのだ。今は、すっかり馴れていて脚を大の字に大きく広げ、モテッとした顔で寝ている。初めて会った時の身体の細さは、今では考えられないほどたくさんご飯を食べペクプクしている。

可愛い仕草や表情で私達を癒してくれるペタ。でも、たまに窓から外を見つめて誰かを待っているようなさみしい顔をするところがある。私はそんな時、少し胸が痛くなる。「きつと前の飼い主さんに会いたくて、今も待ち続けているのかな…。」そんな思いがわく。命を捨てるなんて本当に酷いと思う。動物も、植物もみんな命。命を責任を持ち育てると決心したら、絶対に放り投げてはいけない。捨てた側は何も思わないかもしれないが、捨てられた側は言葉に表すことができないほど悲しくて、さみしいと思う。私は、命を育てることの責任を痛いほど強く実感した。多くの人に私の言葉が伝わって欲しいと強く願う。